

主 題：明らかにされた神の栄光

聖書箇所：詩篇 19 篇

テーマ：どんなことに私たちは心をとめ続けていますか？

今朝、皆さんとともに学びたいみことばは詩篇 19 篇です。先週見た詩篇 18 篇とは違って、この詩篇は多くの皆さんにとってこれまでに何度も読んだことのあるなじみ深いものだと思います。この箇所に関するメッセージも一度は耳にしたことがあるかもしれません。かつてあの C・S・ルイスもこの詩篇を指して「（この詩篇は）詩篇全体の中で最も素晴らしい詩であり、世界に残された多くの詩の中で最も優れた歌詞の一つである。」と口にしていました。このように今も昔も変わらずに多くの人に愛され親しまれているこの詩篇 19 篇は、私たちにきょうどんなことを教えてくれているのでしょうか？内容を詳しく見て行く前に、まずいつもどおりみことばをお読みしたいと思います。

詩篇 19 篇 指揮者のために。ダビデの賛歌

「:1 天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる。:2 昼は昼へ、話を伝え、夜は夜へ、知識を示す。:3 話もなく、ことばもなく、その声も聞かれない。:4 しかし、その呼び声は全地に響き渡り、そのことばは、地の果てまで届いた。神はそこに、太陽のために、幕屋を設けられた。:5 太陽は、部屋から出て来る花婿のようだ。勇士のように、その走路を喜び走る。:6 その上るのは、天の果てから、行き巡るのは、天の果て果てまで。その熱を、免れるものは何もない。:7 【主】のみおしえは完全で、たましいを生き返らせ、【主】のあかしは確かで、わきまえない者を賢くする。:8 【主】の戒めは正しくて、人の心を喜ばせ、【主】の仰せはきよくて、人の目を明るくする。:9 【主】への恐れはきよく、とこしえまでも変わらない。【主】のさばきはまことであり、ことごとく正しい。:10 それらは、金よりも、多くの純金よりも好ましい。蜜よりも、蜜蜂の巣のしたたりよりも甘い。:11 また、それによって、あなたのしもべは戒めを受ける。それを守れば、報いは大きい。:12 だれが自分の数々のあやまちを悟ることができましょう。どうか、隠れている私の罪をお赦しください。:13 あなたのしもべを、傲慢の罪から守ってください。それらが私を支配しませんように。そうすれば、私は全き者となり、大きな罪を、免れて、きよくなるでしょう。:14 私の口のことばと、私の心の思いとが御前に、受け入れられますように。わが岩、わが贖い主、【主】よ。」

さて、きょうこのみことばを通して私たちが考えたいことは、どんなことに私たちは心をとめ続けているかということです。日々どんなことに目を向けて、思いをめぐらせながら生きているのでしょうか？私たちの心は今どんなものを願い、熱心に追い求めているのでしょうか――。

皆さんもよくご存じのように、私たちの心というものは、私たちが何を考え、何をするのかを決める司令塔のようなものです。心にあるものがことばや振る舞いといった形として外側に現われるのです。例えば心の中に満足を持っていれば、それが感謝や賛美として現れますが、心の中に満たされない思いを持っていれば、それが不平や不満、文句といったことばとして、行動として現れることがあります。また私たちが心の中に人へのねたみや憎しみというものを持っていれば、それが相手を傷つけ、悲しませるような行為として現れることもあります。心というものは、私たちのありのままの姿を現すものです。だからこそみことばは箴言 4 : 23 ではっきりと「力の限り、見張って、あなたの心を見守れ。いのちの泉はこれからわく。」と教えていました。私たちの心は私たちにとってとても大切なものです。私たちの心が何を願っているのか、どこに心をとめているかが私たちの行動や生き方に大きな影響を与えるからこそ、私たちは注意深くいつも心を見守っていなければいけません。

皆さんも心が大切なものであることをよくご存じのはずです。でも私たちが自分自身の生活を振り返った時に果たしてどうでしょうか？先週の歩みを少し振り返ってみてください。私たちの心はどこを向いていたのでしょうか？正直になれば、私たちは残念ながら時に日々の生活を送る中で、余りの忙しさであったり、プレッシャーに追われて自分の心を吟味することを怠ってしまうことがあります。心を注意深く見守ることが大切だと知っていながらも、いろいろなものに気が散って、ついつい心を見守ることを軽視してしまうことがあります。また、もっと言えば、私たちはどんな時も神様を見上げて、神様に心の目を向けていなければいけないと信じていますけれども、時にそれ以外のものに心がとらわれてしまうことがあるのです。そしてその結果、誘惑に負けてしまったり、罪に陥ってしまったり。皆さん、そんなことを経験したことはないでしょうか？見るべきところをわかっている、見ることができていない。ですから私たちの信仰生活において、どんなことに心をとめ続けるのかを吟味することは、言うまでもなく非常に大切なことです。

### ○明らかにされた神の栄光：二つの手段

また、私たちはさまざまな戦いや誘惑を経験する中であって、いつも神様に目を向けて心を守り続けるという戦いに勝利し続けていくことを目指していかなければいけません。難しさがあることは皆さんもよくご存じです。一体どうすればそんな歩みをする者として私たちは成長することができるのでしょうか？私たちはきょう見る詩篇19篇からそのことに対する助けを見て取ることができます。この詩篇を記したダビデの心はまさにあるものに心をとめ続けていました。それは神様が明らかにされた栄光でした。ダビデは神様が明らかにされた神様の姿をいつも覚えていました。特にダビデはこの詩篇の中で大きく二つ、被造物を通して明らかにされた栄光、そしてみことばを通して明らかにされた神様の姿、栄光を覚えて、そこに思いをめぐらせていました。彼はほかのどんなものに目を向けることよりも、神様の栄光に心をとめ続け、そのすばらしさをいつも目の当たりにしていました。だからこそ、彼は神様の栄光にふさわしい歩み、ふさわしい応答をしていました。

では、ダビデは一体どんな歩みをしたのでしょうか？神様の栄光を覚えることは、ダビデの歩みにどんな影響を与えたのでしょうか？はっきりと示された神様のすばらしさに対して、彼はどのように応答して生きようとしたのでしょうか？きょうはそのことをよく考えてみたいと思います。きょうこの礼拝が終わった後に、私たちは吟味の時も持とうとしています。このみことばを見ながら、ぜひ自分の心をよく吟味してみてください。自分の心はきょうどこを向いているのだろうか？ダビデと同じように神様の栄光に心をとめ続けているのだろうか、そのすばらしさを自分は正しく理解しているのだろうか。そしてもし理解している、心をとめ続けていると言うのであれば、それにふさわしい歩みをしているのだろうか？そのことを念頭に置いて、早速みことばが教えていることを見ていきましょう。

#### 1. 一般啓示：被造物を通して 1-6節

さて、天を見上げたダビデは1節「天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる。」と詩篇を始めていました。ダビデがまずしたことは、神様の創造されたその自然界を見ることでした。そしてそこに神様が存在されているということ、またそれらすべてのことを造り、支配されている神様の偉大な力や知恵、神様の美しさやまた栄光といったものが明らかにされていることを彼は見たのです。神学者は神様が被造物を通してご自身を明らかにされていることを“一般啓示”と呼んだりします。神様が自然界を通して、どれほどご自身が偉大なのかということすべての人間に対してははっきりと語っておられるのです。

#### ●一般啓示の三つの特徴：

ダビデはこの一般啓示に関して、特に1-6節で三つの特徴を挙げてくれています。神様はこのような形で自然界を通してご自身の栄光を明らかにされています。

##### a) 一般啓示は絶え間のないもの 2節

まず一つ目の特徴として挙げられることは、一般啓示というものは絶え間ないものであるということです。いつまでも終わることがないということです。2節は「昼は昼へ、話を伝え、夜は夜へ、知識を示す。」と続いていました。言いかえれば、神様は昼も夜もどんな時もどんな時代にあっても、変わらずにご自身の偉大さを自然界を通して明らかにされているということです。昼、空を見上げれば、そこにある美しい青空や雲が神様の偉大さを語り、夜、空を見上げれば、そこにあるきれいな星空や月が神様のすばらしさを絶えず訴えているのです。昼が来て、いつも夜が来るように、神様の栄光が語り告げられ、終わることがない。神様は被造物を通していつも語っておられるのです。そのあかしが途絶えることは決してないと。

#### **b) 一般啓示は明白なもの 3節**

また二つ目の特徴と言えることは、一般啓示というものは明白なものであるということです。神様は明白な形で人々に語っておられるということです。神様はいつも変わらずに被造物を通して、自然界を通して語っておられるだけではなく、だれの目にもはっきりと見て取ることができるようにその栄光を語っておられるのです。3節に「話もなく、ことばもなく、その声も聞かれぬ。」と続いていました。もしかしたらこれを読んで、あれ？今まさに神様は自然界を通してはっきりと語っているとそう書いていませんでしたかと混乱した方がいるかもしれません。でも、ここを見れば、「話もなく、ことばもなく……声も聞かれぬ」と、反対のことが書いてあるように感じます。一体どういうことでしょうか。ポイントはこういうことです。神様は確かにご自身の偉大さを被造物を通して私たちにはっきりと語っておられます。しかし、それはもちろん文字どおり私たちの理解できる人間のことばを用いてすばらしさを語っているのではありません。神様は、神様ご自身の栄光というものを実際のことばを用いなくても私たちにはっきりとわかるように明らかにされておられると、ダビデは言うのです。たとえそこにことばがなかったとしても、神様のすばらしさはだれの目にもはっきりと明白に示されている。このことに関して、私が説明をするよりも、皆さんがそのことをよくご存じだと思います。自然界には、人の理解には到底及ばないもの、人の手には絶対に造ることができない壮大なものを私たちは目にします。美しい夕焼け、満天の星空を見る時に、壮大な滝や嵐の中に輝く稲妻を見る時に、きれいな花やたくましく生きている動物たちを見る時に、挙げれば挙げるほど切りはありませんけれども、そういったものを見る時、そこにことばはなかったとしても、私たちにはよくわかるのです。経験ありません？被造物を見る時に、これは人の手によって造られたものでは決してない、これは絶対に偶然できたものではない、間違いなくこれを造った知恵に富んだ力のある創造主がおられると感じたことが。そこにたとえことばがなかったとしても、自然界を見れば、そこに神様がいらっしゃるということが明白にわかります。神様は被造物を通して途切れることなく、またはっきりと明白に私たちに語っておられます。

#### **c) 一般啓示は全世界的なもの 4-6節**

そして三つ目に言えるのは、一般啓示というものは全世界的なものであるということです。神様はどの時代の人であろうとも、またたとえどこに住んでいる人であろうとも、すべての人々に被造物を通してはっきりと語っておられます。そのことが4-6節に続いていました。「しかし、その呼び声は全地に響き渡り、そのことばは、地の果てまで届いた。神はそこに、太陽のために、幕屋を設けられた。太陽は、部屋から出て来る花婿のようだ。勇士のように、その走路を喜び走る。その上るのは、天の果てから、行き巡るのは、天の果て果てまで。その熱を、免れるものは何もない。」と記されています。ここで言わんとしていることは明白です。神様のすばらしさを訴える被造物の声は、世界の隅々にまではっきりと行き渡っている。どんなことばを話す人であろうとも、どんな場所に住んでいる人であろうとも、神様のその栄光はことばのないものだからこそ、すべての人に明らかに示されていると。だからこそこの地上にあって、だれひとりとして、私はそれを知らないと言えるような者はいないのだと。

また、ダビデはここで特に「太陽」ということばを用いることによって、神様がすべての人のものであるということ、神様の偉大さやすばらしさがすべての人のものであることを強調しようとしています。彼は「太陽」を用いて5節に「太陽は、部屋から出て来る花婿のようだ。勇士のように、その走路を喜び走る」と書いていました。ダビデが言わんとしたことは非常にシンプルです。結婚式を控えている「花婿」の姿を想像してみてください。「花婿」は花嫁の姿を見ることを今か今かと楽しみにしているのです。結婚することを楽しみにしているのです。その心は情熱に満ちていたり、喜びに満ちあふれているのです。彼はいても立ってもいられない、落ち着くことができないほど情熱に、喜びにあふれているのです。また同じく「勇士のように」と出てきました。これも想像してみてください。若く力にあふれているような「勇士」、アスリートの姿です。力にあふれているアスリート、その人物も自分に課せられているレースを喜んで、ゴールにたどり着く最後の瞬間まで必死に疲れることなく走り切ろうとするのです。その者は途中で立ち止まろうとはしません。最後まで突き進もうとするのです。それほどエネルギーに満ちあふれているのです。ダビデはこれらの姿を「太陽」に当てはめて言います。考えてください、「太陽」は必ず朝上り、夜沈みます。上らない日はありません、沈まない日もありません。また「太陽」が途中で止まってそこから動かなくなることも決してありません。まるで喜びにあふれて突き進む「花婿」や「勇士」のように、いつまでも世界の果てから果てまでを「行き巡」っていますと。そして「太陽」がすべてのところに行き渡っているからこそ、巡り渡っているからこそ、すべての所を照らすからこそ、だれひとりとしてその熱を逃れることができる者はいませんと。すべてのところに「太陽」があるように、神様はご自身の偉大さを、その大きな力と知恵をすべての人に明白にされているのです。「太陽」があるのが当たり前のように、神様の栄光は自然界を通して明らかにされている。だれひとりとして知らないと言えるような例外はいないと。

ある人はこんなことを考えたことがあるかもしれません。神様を知らない人はどうなるのだろうか、この聖書の神様について聞かされないまま死んだ人はどうなるのだろうか。聖書が教えていることは明白です。この世界に住んでいる者は、どんな人であろうとも、どの時代の人であろうとも、どんな場所であろうとも例外なく神様のことは知っている。なぜかというと、被造物を通して神様がご自身のことをはっきりと明らかにされているからです。神様がそのことをはっきりと明らかにされ続けているからこそだれひとりとして私は聞いていなかった、私は知らなかった、私は見なかったと言える者はいないのです。

思い返せば、パウロも同じことを言っていました。パウロはローマ1：18－20で「というのは、不義をもって真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬虔と不正に対して、神の怒りが天から啓示されているからです。それゆえ、神について知られることは、彼らに明らかです。それは神が明らかにされたのです。神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。」と言っていました。パウロもよくわかっていました。神様の造られたものを見れば、それらを造った方の「力」や「神性」、そしてどれほどこの方が知恵のあるお方なのかを見て取ることができると。余りにも明白でだれの目にも神様がおられることはわかるのだと。だから言うのです。もし、そんな明白な事実であるにもかかわらず、それを見ようともせず、それを見ずから拒んでいるのであれば、その者には神様の怒りが下されると。神様の怒りが啓示されていると。そしてそのさばきが下る時には、だれひとりとして「弁解の余地はない」と。ダビデもパウロもよくわかっていました。

では、私たちはどうでしょうか？きょうの私たちは被造物を通して明らかにされている神様の栄光に対して、神様に対してどう向き合っているのでしょうか？自然を通して偉大な力を持ったこの方の姿を目の当たりにする時に、私たちはこの方に対して感謝や賛美を捧げる者として生きているのでしょうか？それらをすべて造られた創造主に目を向けているのでしょうか？この方の偉大な力を、この方のすばらしさ

をいつも覚えようとしているのでしょうか？それとも創造主に目を向けることではなくて、この方を拒んで生きているのでしょうか？余りにも明白に記されていることにも関わらず、その真理を無視してきょうを生きているのでしょうか？ダビデは天を見上げました。そしてそこに神様の栄光があらわにされていることに心をとめていたのです。被造物を通して明らかにされている神様のすばらしさに心をとめ続けていました。

## 2. 特別啓示：聖書を通して 7-11節

でも、ここで終わりではなかったのです。ダビデは続けて7-11節の中で、ほかのことを語っています。被造物のうちに神様の栄光を見たダビデが次に目を向けたもの、それこそが神様のみことば、聖書でした。彼は続けて7-9節で「【主】のみおしえは完全で、たましいを生き返らせ、【主】のあかしは確かで、わきまえのない者を賢くする。【主】の戒めは正しくて、人の心を喜ばせ、【主】の仰せはきよくて、人の目を明るくする。【主】への恐れはきよく、とこしえまでも変わらない。【主】のさばきはまことであり、ことごとく正しい」と言っています。ダビデは自然界にあるものを目にした時に、そこに神様の偉大な姿があることを見出しました。私たちも自然界をきょう見る時に、神様の造られた被造物を通して語っておられる神様の姿をそこに見ることができるのです。一般啓示を通して私たちは神様がどれほど力あるお方なのか、すばらしいお方なのかということの数多く学ぶことは確かにできます。でもそれ以上に、私たちが神様を知ることができる方法があるのです。私たちが神様の記されたこのみことばを見る時に、被造物では教えることができない真理を見て取ることができます。そして、神学者は一般啓示に対して神様がみことばを通して明らかにされていることを“特別啓示”と呼んだりするのです。

ここで興味深いことがあります。それは1-6節ではダビデは「神」と呼び、神様に対して“エル”ということばを用いていました。この“エル”というのは以前にも見ましたけれども、神様が偉大な力や最高の権威を持ったお方であることを表すことばです。しかし、7節以降を見ていただくと、ダビデは神様に対して「神」とは言わずに、別のことば、太文字の「【主】」ということばを用いました。エル”という名前を用いる代わりに“ヤハウエ”という名前、契約の神であり、自分とも個人的な関係にあるその方の名前を用いて7節以降を記しています。彼は呼び方を変えたのです。ダビデは自然界を見渡す時に、そこに神様のすばらしい絶対的な力を見ることをよくわかっていました。そのことを感謝したのです。でもそれ以上に、みことばを見る時、そこにはより個人的で、より深い神様の知識が、知恵が、すばらしさがあるということをよくわかっていました。だからこそ彼は自分と個人的な関係にあるこの「【主】」という名前を用いたのです。

### ●特別啓示（みことば）の六つの特徴：

この特別啓示と言われるもの、神様がみことばを通して明らかにされているものは、神様がただどんなお方かということをお私たちに教えてくれるだけではありません。この方と個人的な関係を持つということがどういうことなのか、もっと言えば私たちすべての人に必要な救いについて、みことばは私たちに教えてくれています。ダビデはそのことをよくわかっていたのです。確かに空を見上げれば神様の偉大な力を見ることことができる。でもこのみことばを見れば、もっとすばらしい神様の姿を目にすることができる、すばらしい栄光がここに現わされていると。

そしてダビデは7節以降でみことばの持っている六つの特徴を挙げてくれています。

#### a) 完全でたましいを生き返らせるもの 7a節

まず一つ目の特徴として彼が挙げたのは、みことばというものが完全でたましいを生き返らせる力があるということでした。7節に「【主】のみおしえは完全で、たましいを生き返らせ」とありました。ここに出てきているこの「完全」ということばは、間違いや過ち、欠けているところがないということです。つまりみことばというものは最初から最後までどこにも非難されるところがない、完璧なものであるということです。完璧であるからこそだれかが何かを付け足すことも、だれかが何かを引き抜くこと

もできないということです。また、みことばはそのすべてが完全であるからこそ、私たちに必要なものを十分なだけ与えることができるのです。その教えはすべて正しくて、私たちに必要のない教えはこの中には記されていません。そしてみことばがそんな完全なものであるからこそ、完璧なものであるからこそ私たちの「たましいを生き返らせ」ることができるのです。私たちを生まれ変わらせることができる力を持っているのです。ペテロもⅠペテロ 1：23で「あなたがたが新しく生まれたのは、朽ちる種からではなく、朽ちない種からであり、生ける、いつまでも変わる事のない、神のことばによるのです。」と書いていました。私たちは罪と罪過の中に死んでいました。私たちの心は死んでいたのです。でもこの神様のみことばは、そんな死んだ私たちの心を生かし、新しく生まれ変わらせることができる力を持っているのだと。たとえどれだけ真理から遠く離れ、頑なな心であったとしてもそれを変えることのできる力をみことばが持っていることをダビデはよくわかっていました。

#### **b) 確かで知恵を与えるもの 7 b 節**

また、みことばに関して二つ目に言えることは、みことばは確かで知恵を与えるものだということです。7節はこんなふうが続いています。「【主】のあかしは確かで、わきまのない者を賢くする。」、ここで出てきている「確か」というのは信頼できるとか頼りにすることができるということです。主のことばは、間違いがない完全なものであるからこそ、そこに記されていることには疑いなくいつも信頼することができる。決してうそなどつくことのない真実の神様がこのみことばを最初から最後まで記されているからこそ、私たちはどんな時もみことばを信じ、身を委ねることができるのです。そしてこのみことばがそれほど確かで、信頼できるものだからこそ、このことばは「わきまのない者」、要するにまだ十分に知識を持っていない無知でだまされやすい者が必要とする知恵を十二分に与えることができるということです。

箴言もこのように書いていました。箴言 14：15、28：26で「わきまのない者は何でも言われたことを信じ、利口な者は自分の歩みをわきまえる。……自分の心にたよる者は愚かな者、知恵をもって歩む者は救われる。」と。皆さんもよくわかると思います。無知な者というのは、いろいろなものに心がとられて揺らいでしまうことがあるのです。何が正しくて、何が間違っているのかを判断するだけの知恵を持っていないからこそ、その人は自分の思いや感情、考えを優先して、容易にだまされてしまうことがあるのです。どこにそんな無知な者が必要とする知恵があると思います？どんな場面であろうとも、十分な知恵を与えることができるものとは一体何だと思います？ダビデはそれこそがみことばなのだと言うのです。これは私たちにとっても非常に大切なことです。私たちだって日々の生活の中にあって、子育てのこと、職場のこと、夫婦関係や友人関係、いろいろなところで知恵を求められるのです。問題は、私たちがどこに知恵を求めるかということです。みことばが教えるのは、聖書を見ればそこにこの世界を造られた方の完璧な知恵を見出すことができるということです。私たちはこのみことばのうちに、私たちの歩みに必要で、また十分な知恵を見出すことができるのです。

#### **c) 正しく喜びをもたらすもの 8 a 節**

三つ目に言えることは、みことばというのは正しく喜びをもたらすものです。みことばについて8節でダビデは「【主】の戒めは正しくて、人の心を喜ばせ、」と続けて書いていました。主のみことばに記されている神様の命令や戒め、それらはすべて正しいものです。きよく正しい神様によって記されている教えだからこそ私たちに歩むべき正しい道を教えてくれるのです。

ここで大切なことがあります。それは私たちのことをその罪から救い出してくださった恵み深いあわれみ深い神様は、ただ私たちを救ってくださっただけではなかったということです。救ってくださって終わりではありませんでした。救われた後は自分勝手に、自分の知恵に頼って生きていきなさい、自分の思う道を進んで行きなさいなどとは言われていませんでした。神様はみことばを与えられたのです。この方は私たちがどのように信仰生活を歩んでいくべきなのか、どのように私たちが罪を離れ、きよさ

を追い求めていくべきなのかをすべてこのみことばを通して教えてくれているのです。みことばこそが私たちが主に喜ばれるものとして成長する道へと導く光になるのです。詩篇119:105でも「あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。」と言っていました。皆さん、よく考えてみてください。私たちの歩みにもさまざまな戦いや難しさを経験します。罪との葛藤を経験することもあれば、不安になったり、恐れを抱いてしまったり、私たちの心をざわつかせるようなものが私たちの周りにはたくさんあふれています。時に、自分の頭には理解できないような問題が起きて、自分自身が暗闇の中にひとり取り残されているかのように感じることもあるかもしれません。そしてそんな中に置かれれば、私たちは自分の心から喜びや平安が消え失せていくような感覚を抱いたりすることがあるのです。

もしそのような中に置かれることがあったとすれば、置かれているのだとすれば、皆さんはその時どういうふう振る舞うでしょうか？どこに心を向けるでしょうか？みことばが教えていることは、私たちが主の教えに従うのであれば、主が私たちの心に喜びをもたらしてくれるということです。「【主】の戒めは正しくて、人の心を喜ばせ」と書いてありました。皆さんがそのことをよく知っているのだとすれば、果たして実際にそのようにみことばを見ているでしょうか？私たちは困難の中に置かれれば、みことばと時間をともにすることよりも、それを後回しにして自分の抱えてる問題にのみ目を向けることがあります。自分の感情や状況に身を委ねてあたふたするかもしれません。そしてみことばを見ず、私の心には喜びがありませんと言うのです。みことばが言っていることを思い起こすことです。「【主】の戒めは正しくて、人の心を喜ばせ」る、神様のことばに従うことがその人の心のうちに喜びをもたらすのです。たとえどんな苦しみに遭ったとしても、私たちはみことばを見ることが出来ます。そしてみことばが私たちが何をすべきなのか、どんな正しい道を歩んでいくべきなのかを教えてくれるのです。私たちがみことばに従って、正しい道を歩んでいくのであれば、主はその人の心のうちに喜びを与えてくれるのだと。

#### d) 明瞭で人の目を明るくするもの 8 b 節

四つ目は、みことばというのは明瞭で人の目を明るくするものだということです。「【主】の仰せはきよくて、人の目を明るくする。」と続いて記されていました。ここで使われているこの「きよ」ということばは、理解しやすいとわかりやすい、明瞭であるといった意味を持っています。みことばはわかりやすい、つまり聖書の教えていることは私たちのうちに混乱を招くようなものではなく、私たちにわかりやすく真理を教えてくれるものだということです。神様は、私たちを愛しているがゆえに、私たちがこの方のために何をすべきなのか、また何をすべきでないのかといった命令をみことばを通して私たちに与えてくれています。そうやって私たちの歩むべき正しい道を主は教えてくださっているのです。でも皆さん考えてみてください。もしその主の示している道が複雑で理解できなかつたら、どこに行けばいいんですかと私たちは混乱するのです。でもみことばは安心しなさい、みことばはきよく、私たちにわかりやすいと言っています。私たちが何をすべきなのか、何をすべきでないのか、神様がどのようなお方なのか、そのすべてを私たちにわかりやすく教えてくれていると。

#### e) きよく正しい恐れを生み出すもの 9 a 節

五つ目に言えるのは、みことばはきよく正しい恐れを生み出すものだということです。9節は「【主】への恐れはきよく、とこしえまでも変わらない。」と続いていました。ここでもまた「きよ」ということばが出てきました。この「きよ」というのは先ほど見たことばとは異なって、汚れや欠陥がないということです。みことばには間違いがまったくなく、不十分なところもないということです。神様のみことばのうちには欠陥がない、だからこそどの時代においても変わらずいつも力があり、どんな人のうちにも働くことができるのです。みことばは決してすたれることがありません。イエス様もはっきりとマタイ24:35で「この天地は滅び去ります。しかし、わたしのことばは決して滅びることがありません。」と言われていました。みことばが決して変わらないからこそ、みことばがいつも同じ真理を私

たちに教えてくれているからこそ、私たちはこのみことばの上に立ち続けることができます。私たちの周りのものはいろいろなことによって変化していきます。でもみことばは変わることがありません。もしかしたら私たちは周りの状況が苦しくて、私たちの目には変わらないように見えることがあるかもしれません。そんな時であろうとも、私たちは変わらないみことばの約束に信頼し続けることができます。神様はこの状況さえ支配されておられ、その神様に信頼することがみことばを通してできるのです。そしてそんな変わらないきよいみことばだからこそ、それを読めば読むほど、そこに記されている神様の正しさや偉大な力を見れば、読む者の心のうちには神様に対する正しい恐れを生み出してくれます。私たちがみことばを見る時に、変わらないその真理を見る時に、神様のすばらしさを見る時に、偉大さを見る時に、きよさを見る時に、正しさを見る時に、みことばは私たちの心にふさわしい恐れを生み出してくれるのです。このみことばというのは、私たちがどのように主を礼拝するべきなのかということも、どのように主を恐れる者として成長するべきなのかということも十二分に教えてくれています。

#### f) すべて真実で正しいもの 9b節

そして最後六つ目に言えるのは、みことばはそのすべてが真実で正しいものだということです。9節の終わりに「【主】のさばきはまことであり、ことごとく正しい。」と書いてありました。みことばを見れば、そこに正しい審判者である神様からのさばきが数多く記されていることを見ます。聖書はさばきも記されているのです。ダビデはそれらを指して言います。神様は正しい義なるお方なのだと。だからこそこの方の下されるさばきもことごとくすべて正しい。間違っていることなどいっさいないと。みことばは初めから終わりまで、いつもどんな時も変わらず真実なものだと、ダビデは告げていました。

ダビデはこうして神様のことがどれほどすばらしいものかということに心をとめていたのです。そしてそこにはっきりと示されている神様の栄光、神様の姿を心にとめ、目をとめ、そしてそのことを心から感謝していました。だからこそ彼は自分の見ているそのみことばのすばらしさを覚えた上で、最後にこうまとめて言うのです。10-11節に「それらは、金よりも、多くの純金よりも好ましい。蜜よりも、蜜蜂の巣のしたたりよりも甘い。また、それによって、あなたのしもべは戒めを受ける。それを守れば、報いは大きい。」と。ダビデが言わんとしたことは、非常に簡単なことです。ダビデにとってみことばとはどんな金や純金、財宝よりも価値があるものだったということです。ダビデは王様であり、ほかのどんな人よりも金や財宝を持ち、富を有していたのです。しかしそんな彼が自分の持っている財宝を見た時に、そして神のみことばを見る時に言うのです。どんな富を持つことよりもこれこそが価値のあるものだ、私はこのみことばを持つことを喜びとすると。またダビデにとって、みことばは「蜜」や「蜜蜂の巣のしたたりよりも甘い」と言っていました。どんなものよりもみことばこそが彼の心に満足を与え、彼の心を豊かにするものだということをよくわかっていたのです。

でも、ここでよく考えてみてください。もし私たちひとりひとりが今学んできたことを心から信じているのであれば、皆さんもそのようにみことばに対して振る舞わないでしょうか？みことばこそが完全でたましいを生き返らせることができる。みことばこそが確かで知恵を与えることができる、みことばこそが正しくて喜びをもたらす、みことばこそが明瞭で人の目を明るくする、みことばこそがきよく正しい恐れを生み出してくれる、そしてみことばこそがすべて真実で正しいものなのだと、私たちがそれを信じているのであれば、自分自身に問いかけてみてください。私たちはどこに心を向けているのでしょうか？ダビデと同じようにこのみことばを熱心に追い求めているのでしょうか？ダビデはどんな財宝よりも、どんなものよりもこのみことばを選びました。聖書に心をとめ続けて生きることを彼は追い求めていたのです。私たちはどうでしょうか？神様を見上げて、このみことばに従うことを何よりの喜びとしているのでしょうか？ダビデは天を見上げ、そこに現わされた神の栄光を見ました。またみことばを見て、そこに現わされている神様の栄光に彼は心をとめました。彼はそこに示された神様の栄光、すばらしさ



を見たのです。そしてそれを己の喜びとしました。それこそが彼の何よりの願いだったのです。そして彼が神様のすばらしさに心をとめていたからこそ、最後にそれにふさわしい応答をするのです。

### ○明らかにされた神の栄光：正しい応答 12-14節

まず、12-13節を見てください。ダビデは「だれが自分の数々のあやまちを悟ることができましょう。どうか、隠れている私の罪をお赦してください。あなたのしもべを、傲慢の罪から守ってください。それらが私を支配しませんように。そうすれば、私は全き者となり、大きな罪を、免れて、きよくなるでしょう。」と言いました。ダビデが何をしたかわかりますか？ダビデは被造物を通して神の栄光を見ました。みことばを通して神の栄光を見ました。神のすばらしさ、神の偉大さを見たのです。その神様の偉大さを覚えて終わりではなかったのです。神のすばらしさを見たダビデは、自分自身のうちを見ました。すると彼は自分自身がこのすばらしい神様の前に立つ資格などいっさいない罪深い者であることをそこに見たのです。ダビデは主に目を向け、主と自分を見た時に、自分自身の本当の姿を正しく理解していたのです。ダビデは特にここで自分のうちにある二つの罪について教えています。

#### 1. 隠れている罪

一つは「隠れている……罪」ということばが12節の最後に出てきました。これは私たちが意図せずに無意識に犯してしまう罪のことです。それが長い間習慣をかけてかもしれませんが、自分のうちに深く根づいているからこそ、それに気づくことができなくなっているような罪のことを言います。皆さんもそのような罪を持っているのです。自分が全く意図せずとも、知らないうちに無意識にしたことでだれかに罪を犯してしまったり、傷つけてしまったり。ほかの人に言われるまで気づかないようなそんな罪を持っているのです。ダビデはみことばを見た時に、自分自身のうちにそんな隠れた罪があることに気づいたのです。だからこそ「どうか、隠れている私の罪をお赦してください」と祈ったのです。

ダビデは自分自身のうちにある罪を軽く扱ってはいませんでした。彼は自分には見えていなかった罪を見た時に罪を告白し、神がきよめてくださるようにと願いました。これは私たちにとっても非常に大切なことです。なぜかというと、たとえ私たちが無意識であろうとも、なかろうとも、神様の前にどんな罪も罪だからです。神様は私たちのすべてをご覧になっておられます。だとすればダビデと同じように、私たちも自分のうちに罪を見出すのであれば、認めるのであれば、すぐに告白して、へりくだってあわれみ深い神様の赦しを祈り求めることです。

#### 2. 傲慢の罪

二つ目にダビデが取り上げた罪は「傲慢の罪」でした。13節に出てきました。この「傲慢の罪」というのは、自分自身が意図的に間違っていると知りながら犯してしまう罪のことです。ダビデは「隠れている……罪」だけではなくて、自分自身が犯したこんな罪に対しても主の赦しがあることを、またそれらから自分が離れることができるようにと主の守りを祈り求めています。ダビデは自分が主の前に犯した罪を軽々しく取り扱うことはなかったのです。罪を告白し、主の前にきよさを求めています。

そしてそんなダビデが最後に14節で「私の口のことばと、私の心の思いとが御前に、受け入れられますように。わが岩、わが贖い主、【主】よ。」と言うのです。ダビデは自分自身の弱さも愚かさもよくわかっていました。彼は自分のうちには罪に勝利する力がないことも認めていました。でも同時に、彼は自分の主がどれほどすばらしいお方なのか、どれほど偉大なお方なのかを被造物やみことばを通して目の当たりにしたのです。だからこそ彼はこの神様に身を委ねて、罪から離れてこの神様の前に受け入れられることばや心を持つことができるようにと願っていました。これこそが神様の栄光を目の当たりにした者の正しい応答なのです。これこそが神様のすばらしさを目の当たりにした者が取るべきふさわしい態度なのです。

### ○まとめ

きょう私たちはこの詩篇を通してさまざまなことを学びました。でもここで教えられている大切なことは、何度も言いますが、私たちがどこに心をとめ続けているかということです。ダビデは主の偉大さとその栄光に心をとめていました。でも、忘れてはいけないのは、彼はそこで終わらなかったのです。彼はその主のすばらしさを通して、自分の罪深さを正しく見、素直に神様の前に罪を告白し、悔い改めていました。そして愚かな自分に目を向け、自分に信頼していくのではなく、助けを与えることのできる「岩」であり、「贖い主」である方に身を委ねていたのです。心にあることが、その願いがその人物の生き方に現れます。主に心をとめていたダビデの願いは主の前を正しく生きていくことでした。

では、私たちはどうでしょう？きょうの私たちもダビデと同じように、自然界を見る時に、またみことばを見る時に、神様のすばらしさを見て取ることができます。私たちはそこに現わされている神様の偉大さを心に蓄えながら、感謝しながら生きていくことができます。そこに私たちは最高の喜びを見出すことができるのです。そして私たちはダビデ以上にすばらしいものを持っています。それは神の本質の完全な現れとしてこの地上に来られた救い主イエス・キリストです。ヘブルの著者はこう言っていました。ヘブル1：1-3に「神は、むかし父祖たちに、預言者たちを通して、多くの部分に分け、また、いろいろな方法で語られましたが、この終わりの時には、御子によって、私たちに語られました。神は、御子を万物の相続者とし、また御子によって世界を造られました。御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現れであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。また、罪のきよめを成し遂げて、すぐれて高い所の全能者の右の座に着かれました。」と。私たちはこの栄光にあふれたイエス・キリストにきょう心をとめて生きていくことができます。罪のいっさいない神の御子であるお方が、私たちのような罪深い者のために十字架にかかって、その血を流してくださったということを覚え続けることができます。この方が自分を犠牲にすることによって成し遂げられた罪のきよめを覚えて、そこに感謝をして、そこから与えられる救いをいただいて生きていくことができます。

皆さん、そのことを覚えることです。私たちは自然やみことばを通してはっきりと示されている神様の姿をみずからの意思で拒み、神様に逆らって生きていました。でもそんな者に対して神様は救いを与えてくださったのです。この方を受け入れ、信じ従う者には永遠の命を与えるというその約束も与えてくださいました。そして、この方は死んで終わりではなくて死からよみがえり、よみがえられたこの主といつかお会いするという約束も私たちは持っているのです。その約束を私たちがどこから知るかというと、このみことばを通してそれを知ることができるのです。みことばが完全なものであるからこそ、私たちはここに信頼を置いてその約束が成し遂げられると信じることができます。だとすれば、私たちはどこに心をとめ続けているのでしょうか？皆さん、周りを見渡すことです。周りの自然を見渡してみてください。みことばを見てください。イエス・キリストを覚えてください。そしてそこに明らかにされている神様の栄光に思いを巡らせ、私たちはこの主にふさわしい歩みをするのです。自分の罪を軽々しく扱うのではなく、主の前に悔い改めて、ますます主を求め続けることです。ここに私たちの喜びや満足があります。ですから続けて、私たちの主の栄光に心をとめ、この方のすばらしさをあかしする者として成長し続けていきましょう。